

特集

モラルの功罪

経済学の視点から

今号の特集のテーマは、「モラル」である。モラルという単語を一般的な辞書で引いてみると、道徳とか倫理とかいった単語が出てくる。それでは、道徳や倫理とは何だろうか。様々な定義があるとは思いますが、およそ、ある社会において人が正しく行動するための規範、あるいは人がその社会において守るべき道、ということになる。

やや強引なこじつけの印象はあるものの、今回はあえてそのモラルの負の側面について考えてみることにした。規範は、絶対不変のものではない。異なる社会には、異なる規範が存在する。同じ社会であっても、時とともに規範は変化していく。現在のわれわれが生きている日本社会の規範は、100年前のそれと異なることは明らかであるし、30年前のそれとも同じではない。法律のように明文化されたものではないため、変化の瞬間が見

えにくいだけである。

さて、モラルが不変のものではないならば、漠然と正しいと思われているような事柄について、少し疑ってみることは面白い。それが、本当に規範となるべきことなのかどうかを考えてみることは大切である。なぜならば、それがより良い次の規範を作りだしていく原動力となるからである。と、なんだか大げさに書いてみたが、取り上げる個々のトピックは、とても身近なものである。

1つめは「節電」である。最近でこそ少し緊張が緩んできたものの、少し前までは多くの人たちが、頑張って節電をしていた。2つめは「食の安全・安心」である。政府、多くの自治体がこのコピーを宣伝しており、なかには小学校でこのテーマの授業や取り組みを行っているところもある。3つめは、日本特有の「みんなで心を一つにして頑張ろう！」と

いったタイプの取り組みについてである。特に大震災後、多くの人々が、一つになって頑張ることは美德であると感じていたのではないだろうか。4つめは、どちらかといえばエコノミストのモラルを問うものである。私たちの多くがエコノミストの経済予測を信じこんでしまいが、その有効性はどのようなだろうか？

今回はあえてモラルの負の側面について経済学の観点から切り込んだのであるが、決して現在の規範を否定しようとしたのではない。客観的に事象を観察することを、また面倒くさげらずに冷静に物事を考えることが大事であり、それに気づいてもらいたかったのである。今回の特集をきっかけに、より深く考える癖を身につけていただければ幸いである。

(編集担当：東田啓作)